
“サイキョウ”は、誰？

さゆ&梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“サイキョウ”は、誰？

【Nコード】

N2897BA

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

今日も今日とて、世界は彼と彼女と彼を中心に回っている――
――だって、三人は選ばれし者だから。と

ある少年B「世界征服しちゃう？」とある少女U「だって、私たちの幸せの在処だもの」とある少年T「誰も、傷つけないで、傷ついて、欲しくないんだ……！」

……メイン連載であるリレーと同じくらいの長編になりそうだったものを自重したもの。メインの御三方に色々語ってもらって、あの人にオチつけてもらいました。

とある少年Bの本音（前書き）

梨です。今年もさゆともどもよろしく願います

年明け一作目は予約投稿を使ってみようと思ってちまちま書いたの
で、一応完結したものを順々にやっていこうと思っています。

とある少年Bの本音

「正直、こんな世界嫌いだよ」

…そうか。

「何でこんな能力^{チカラ}与えたりしてくれたんだろうね？　ほんと忌々しい」

…顔がすげえゾ。

「アハハ」だって本音だしね。　そりゃ笑顔も崩れるってもんだよ」

……………

「でも一つだけ感謝してもいいかな。　あの二人と、会えたことくらいは。」

だって奇跡みたいだよな？　生まれた場所も、定められた運命も、形成された性格も、あらゆる環境が違うのに唯一つ、僕らには同じところがある。　同じ、能力^{チカラ}を持っている。これって凄いことじゃない？　っていうか凄いことだよ。こんな世界、他にはないもの。僕が言っただから、間違いないよ」

だろうな。

「二人と出会えたことで、僕は初めて自分っていう存在を確認できたんだ。　二人は、僕にとって神様みたいな人だよ」

あの二人が…神、か…

「だからあの二人に何かあったら、雑魚一匹だろうと幹部だろうと一国だろうと世界だろうと容赦はしないよ」

心狭えなオイ。途中からスケールでかくなりすぎだ、世界滅ぼす気か？ テメエらならできるんだからやんなよ

「さあそれはどうだろうね」 無いと思うけど、二人ともがそれを望むなら僕はするよ」

…まあ、二人ともが世界の滅亡なんかを望むことはないだろうな…

「僕らは君たちとはまた違った意味で“選ばれし者”だし、何より生まれた時から背負ってるんだし。世界滅亡させたからって何か得するわけでもないし、唯少し楽になるだけだし？ アハ、そう考えたら世界滅亡ってやつすい上に実が無いね」

値段がつけられるようなもんじゃねーだろ…

「どうかな？

人間にはオモイデ^{ヒト}ってモノがあるしね」 オモイデがあるってだけで捨てられないって人、たっくさんいるじゃん」

あ、そういう意味では世界は僕らのオモイデの上で重要な存在か

」 じゃあ簡単に滅亡させられないね」

滅亡させない、って選択肢はないのか…

「世界とやらがなんぼのもの、って感じだよな」僕にとっては二人以上に重要で大切な存在なんてないよ！」

ついに格下扱いか…

「今まで世界とやらが僕らに何をしてくれたっていうの？」

一、この世界に生み出した

一、こんな能力を与えた

一、酷い環境に生かした

一、二人と…うっん、彼と中々会わせてくれなかった

一、二人を苦しめる！

一、

途中から脱線してんぞ

「あれ、そうだったかな？ まあいいや」

あんな劣悪な環境で生きてきてさ、僕ってよく健康体に育ったよね」

性格は盛大に歪んだみてーだがな

「だって仕方ないじゃないか、僕らは『大空』なんだよ？

まあ『大空』の気持ちは『大空』にしかわからないだろうけどね！」

そらそーだ。わかつたらたまったもんじゃねえ。

「アハ、君の読心術なんてめじゃないもんね」

考えも感情も、体調も記憶も、あらゆる全てを読み取れる能力。
それが『大空』の『調和』だからね！

尤も、本来はそんなことのために使う能力じゃないんだけど、
でも世界とやらが生まれた時にすでに僕らに与える能力だから、
無意識にやっちゃうんだよねー」 だから僕は苦しめられたし、
今も苦しめられてるわけだけど」

苦しんでるようには見えねーがな

「半分は言葉の綾だね」僕は育ってきた環境上、ポーカーフェイスが身につきちゃってるからさ」

二人は苦しんでるよ？それなりに！特に片方がね！」

…アイツはな。アレは情けないっちゃ情けないが…

「アレは彼の長所だしね」別に直すことはないでしょ！」

…だな。

「全くさ！感情を高ぶらせるなって言ってるのに二人の前で大声で感情的に主張する馬鹿者はいりさ！むかついちゃったし二人も疲れてたし何より彼が仲間会いたそうな顔をしたから、今回の計画を立てただけどね」

それで三人で揃って出奔して日本で学生生活か。良い身分だな、マフィアとあるもんが。

「いやだなあ、家出って言うてよ」

変わんねーっつーか寧ろ悪化してんじゃねーか

「でも、帰る場所はあるデシヨ？」

…あー、ああ、そうか…

「まあ彼女は『貴方たち二人のいるところが、私の帰る場所だから』
って言うてくれたけどね」

…ファミリーの奴らが男泣きすんぞ…

「あと、そこが『^{シアワセ}幸福の在処だから』、だってサ、僕もそう思っ
てるけどね！」

三人でいれば、^{シアワセ}幸福だと？

「そうだよ、寧ろ三人でいなければ^{シアワセ}幸福になんてなれないんだ！

だって僕らは『^{シアワセ}大空』だからね」

どんなに望まなくなつて、嫌がつてたつて、無意識に感じ取つて
しまう。

周囲の人々が自分たちに抱く畏怖、羨望、不安、野心、恐怖、焦
燥、思惑、不満なんかをね！

感じ取つてしまえば僕らだって人間だもの！ 傷つきもするし苛
立ちだって感じるし、何より脅威に感じるよ？

大切な人が傷つけられるかもしれない、
利用しようと多くの人が押し寄せてくるかもしれない、
この能力を研究しようとしてくる人がいるかもしれない、
思い通りにしようと画策しようとするかもしれない… あげたら
きりがないけどね！

何でそう思うか？ だってそういう考えすらも読み取ってしまう
んだ！そこに実行するか否かの意志があるかないかすらもね！

だから僕らは恐怖する。 自分自身に。

だから僕らは三人でいようとする。 だって三人でいれば恐怖を
感じない！

僕らは互いの考えが読める。 読めることを知っている。 読まれ
ても読み返せるから恐ろしくない。 僕らは唯一三人だけの、“対
等”な存在なんだ！

正直僕は、他の二人も僕みたいに捻くれた性格だったらしよ
うと思ってたんだ。

でもそうじゃないと知ったとき、どれほど嬉しかったことが！

…生まれて初めて泣き崩れたんだっただか？

「お恥ずかしながらね」

だから正直…、今回のことは、許せないんだけど、ネエ…？」

…あの襲撃か。

「ホントさア…？ ちょっと真剣にタイムパラドックス起こした
くなっただよ」 具体的には過去に戻って生まれたばかりの命を、と

かね」

そいつはお前の能力^{チカラ}じゃ無理だろ…

「そりゃ本来の僕の能力^{チカラ}なら平行世界の虫螻共を全て消滅させることくらいしかできないけど」

…それで充分だろーが

「まつさか！ 彼と彼女と、あと僕と、『大空』である世界の中核^{コア}に手を出そうなんて馬鹿なことを考えたんだよ！？ 社会的生物的精神的肉体的あらゆる面においてその存在を許されることがあつてはならないよ！」

何か同じものを二回言つてた気がすんだが…気のせいかな

「投獄だけなんて足りないさ、生きること死ぬことも許されない、かといってあらゆる痛みをもつて罰則を与えても足りないよ！！」

人の話聞いちゃいねえ。 まあ元々会話なんてあるようでないがな。

「ま、実はこの辺はもう話についてサ、彼には内緒でちょっとやっっちゃおうかって話になつてね」

…まあ、一応聞こうか。誰とだ

「え、勿論僕らのお姫様に決まつてるじゃないか」

知つちやあいたが、あの子も随分とはつちやけたな…

「アレは天然でしょ？ いや、僕も彼もみんな“ひっくるめたら天然だ”って誰か言ってたけどね♪」

ああ、確かに。色々方向性が違うが…

「で、さ。リボーンくん？ 手、貸してくれるよね？」

…何にだ。

「決まってるじゃないか！」

—— 僕らの、世界征服計画にだよ。

「…（はあ）…」

大きく、大きく溜め息をつく。 どこで何を間違ったのかと、己に問いながら。

（いや、俺は何も悪くねえ。 … 敢えて言うなら、余計なことをしやがったあのファミリーが…）

起こしてはならぬ獣を、目覚めさせてしまったと言えよう。

生まれた時からその能力を^{チカラ}発揮し、およそ子どもらしくない子どもとして育つことで有名な、『大空』。

中でもトウリニセツテの大空属性である“選ばれし者”たちは、その特性が飛びぬけて強く、苦しまないではいられない人生を送る。

彼は、そういう意味では被害者だ。

今代の『大空』の中では、最も劣悪な環境で過ごし、最も苦痛を抱えて生きてきた人物だから。

（… 取り敢えずは、行くか…）

何をどうしたのかは知らないが、先程までテレビ画面に映ってい

た男の顔を脳内から振り払い、彼の家庭教師ヒットマン^かは、身支度を始めた。

未来に彼自身すらも称するようになる、彼の最高傑作（とその友人と部下）がいる、極東の島国へ、再び飛び立つために。

とある少女Uの述懐

「あのひとは神の使いか何かだとたまに思っんです」

いきなりかオイ。

「いくら環境が違うとはいえ、『大空』にあつてあそこまで純粹に育つたあのひとは、正直、わかつていても納得できないんですよね……」

まあ残る『大空』であるお前ら二人を見ると、確かにそう思わざるを得んがな…

「ほんと、おじさまズルイです！ あのひとにわたしたちの中で一番最初に会ったのはおじさまなんですもの！」

…それは、俺に言われてもな…

「でもおじさまが行ってくれたおかげで、今がある、というのもあるんですけど…」

だつて仮に他の人が行っていたら、あのひとはわたしたちのところへ、…まず、イタリアに来てくださらなかった気がしますもの。おじさまだからこそ、あのひとをイタリアへ来させることができましたんだと思いますわ。 そういう意味では感謝しています」

…“そういう意味では”、な…

「だって、『大空』の残る一人である彼は、その劣悪な環境からあそこまで性格が歪んでしまったんですよ？ 初めて会ったときの、彼の纏うあの感情と過去と考え！ 思いだしたら今でも武者震いします…」

何か間違ってるだろ、それは…

「お互いの考えが読めちゃうものですから、不本意ながら意気投合してしまいましたけれど。 そういえば、あの会談が終わったあと、いきなり周囲の反応が変わったんですね。 おもに彼とわたしとの関係を疑うような感じで。 何故でしょう？」

そりや今まで父親代わりにおいてた周囲のオトコどもに一切目を向けなかったお前が、初めて（傍目から見れば）同年代の男と談笑したからだ

「え？ そうなんですか？」

ああ。 ジッリヨネ口でそんな話が飛び交っていると、コロネ口やら風やらスカルやらから何でか俺んとこに連絡が来たからな、よく知ってる

「何でそこで素直にわたしに聞かないんでしょう？ あとで連絡して、抹消して貰わなきゃ…」

…

「大体、周囲の男共、と言ったって、こちらとしては考えが読めちゃうんですよ？ 素直に甘えたりできるわけじゃないんですか？ そりゃあのひとはしてたみたいですけど、それはお母様が特別だ

「だから…」

まーな。お前だってアリアが生きてたらそこまで中途半端な歪み方はしなかっただろーな

「え？」

アリアはお前たちと同じ『大空』だからな

「ああ…そうですね。幼いころは、何だか温かいものに包まれて、シアワセだったような記憶があります」

…すまん。俺が悪かった

「いえ、おじさまは悪くありません。あのひとのお母様は、ごく普通の方なのに、あのひとを受け入れられたんですよ…凄いです。」

チカラ
能力の持ち主であるわたし自身でさえ、自分の能力に恐れを
チカラ
抱き疲れ、涙し嘆き呪い、苛立ち怯えて震えるというのに…」

ママンか。まあ母親は偉大ってことだな。

「そう、ですね。」

…ところで、さっきから気になってたんだが何してる？

「見ての通り、弓を引く練習ですよ？」

イリデッセン・タルド
…“無双攻撃”、か…？

「はい。みんなの力を借りますから、さほど鍛える必要はないのですけれど、しないよりは良いかと思ひまして」

ソレ、どこから借りてきた…？

「弓道部から、彼が借りてきてくれました。にしても大きいですね、わたしの力ではとても弦を張れないんですが…」

やるな。やらなくていい。

「でも、せつかく…」

しなくても以前は引けたんだろう？　ならするな。危なっかしくて見てられねー。怪我するゾ？

「うっ…わかりました…」

ったく…今まで武器なんざ見向きもしなかったのに、一体どういう心境の変化だ？

「あのひとが…」

…アイツが、どうした

「学校に襲撃があつてから、ずっと浮かない顔なんです。誰も、傷ついて欲しくない、嫌な思いなんてさせたくない…、わたしたちの考えすら届かないほど、そればかり考えているんです」

…そうか…

「だからこそ、彼と結託する気になったのですけど。決定的だったのは隣で復讐計画を考えているのに気がつくこともなく、また口に出してもあのひとが目覚めることがなかったこと、ですね」

寝てる横でんな計画立ててたのか…

「いつもなら考えてる時点であのひとは目覚めるんですが…。わたしたちが有言実行ってことは、よく知っていますし」

…ちよつとマテ、考える？考えを読み合ってたのか？

「？おじさまだってよく読心術で会話なさってるじゃないですか」

ああ…いや、そうだが、な。それで気付くのか…？

「ええ、気付きますよ。わたしたちなんかは寝てる時はもう慣れているので、意識せずとも読む必要があるかないかを寄り分けられるんですが、あのひとはずっとそういうことをしてこなかったもので、寝ているときは無意識に色々読んでしまっんです。そういうときって結果的に夢とか、あるいは精神世界なんかに影響が出るので飛び起きちゃうんですよね。わたしも幼いころは経験があります。」

まあつまりは、あのひとはすぐ近くで暗殺計画など立てたら飛び起きるってことですね」

…そうか。

「自分だって絶対防御を使って疲れているはずなのに、わたしたちの心配までして。」

ビジュアルヴェ・プロテツィオーネ

…あのひとが、一番大変なはずです。イルデッセンテ・タルド 無双攻撃はおしゃぶりを
通して力を集められるし、マリッタイム・ヴィズイビリタ 総合視野は力を集める必要すらないのに、
ビジュアルウェ・プロテツツイオーネ 絶対防御だけはその場に仲間が全員いて、そうしてその場で力を集
めなければいけない。それがどれほど苦痛で、辛いものか…!!」

そうだな…

「その上、他の『大空』にだってその苦しみは代替わりできないな
んて…っ ああ世界なんて忌々しい！」

…お前もか。

「え？何かおっしゃいましたかおじさま？」

いや…。

「それにしても、おじさま、よく来てくださいましたね？ 彼が連
絡を取るといったときは正直来てくださらないと思っていたのです
けど」

…今回のことは、俺もそれなりに思うところがあったな。何より
九代目から指示があった

「さすがは九代目様！」

陰ながらボンゴレは全力で支援するそうだ。

「それは良かったですわ。 もしあのひとを見捨てるようなファミ
リーならさっさと潰してしまわなければいけないところでしたし！」

……このきわどい発言はもはや血だな…

「では、あの虫虻共ムシケラドモの駆除完了が計画のスタートの合図です。よく覚えていてくださいませ、おじさま」

……………ああ…

「不謹慎ですけど、また見れるんですね。

ビヴァルヴェ・プロテツィオーネ
絶対防御が…」

ンなうつとりするようなモンなのか？

「ええ、とても綺麗なんです！ オパールのように七色に輝く薄い膜が、まあるく覆っている感じ、ですね。とてもキラキラしていて…」

ああ、いい。本番で見る。取り敢えずとても感動するのはよくわかった。

「ええ、それはもう！」

だが、ジッリヨネロの奴らは「無双攻撃イリデッセンテ・ダルドの美しさは言葉で語れない」、と言っていたぞ？

「それは…。七色に輝く弓につがえるのは虹の軌跡を残す矢ですから、美しいと言えば確かにそうなのかもしれませんけど…」

慣れるとそうでもない、か？

「はい。わたしは使い手ですから、幾らでも何度でも見れますし。
マリッティモ・ヴィズイビリタ
総合視野は何というか、能力としては素晴らしいんですが、その、
チカラ

…地味ですし…」

それは聞いたな。 奴自体が虹色に輝く物体になるんだっただか？

「はい。 マリッティモ・ヴィズイビリタ 総合視野が一番見れる頻度が高いと思いますよ？彼は能 チカヲ力を使うことに躊躇いが無いので」

そうか。 まあそれなりに楽しみにしておく

「賢明ですわ。 ああ、おじさま、今回は許して差し上げますが、この部屋は基本的わたりしたち三人のためのものなので、勝手に入って来ると痛い目を見ますよ？」

…心得ておく。

(…何だかな。)

相手はアルコバレーノのボス、ということのを抜きにしても、逆らえない空気を纏う少女。

対面していたのは、某中学の一室だ。何でも某風紀委員長殿と交渉して手に入れた、三人のためだけの部屋らしい。守護者たちすらそうそう入れてもらえないのだとか。

中は普通だった。…いや、普通すぎた。だって教室の一つのはずなのに、どこかの家の一室のようになっているのだ。超寛ぎ空間。「…っつーか、トゥリニセツテの『大空』の奥義、使うのに躊躇いが無いんだなアイツら…」

ぶつぶつ言いつつ歩みを進める彼は、どう見ても不審者である。だが彼にも彼なりに思うところがあった。

“トゥリニセツテの『大空』の奥義”とは、意味はそのままだ。先程の会話に出ていた、アルコバレーノの『無双攻撃』、マールマリッティモ・ヴィズイビリタの『総合視野』、ボンゴレの『絶対防御』の三つのことだが、それぞれピエアルヴェ・プロテツツイオーネの日本名が示す通り、三つを組み合わせるとんでもないことになる技である。

どんな装甲をも射通し破壊し尽くす、使い手の意思に応じて変化する無差別広域攻撃、無双攻撃。イリデッシュエンテ・ダルド

あらゆる物事を様々な視点から見通し、また知略と策謀の限りを尽くせる、総合視野。マリッティモ・ウイズイヒリタ

いかような襲撃・進攻は勿論のこと、針一本ですら傷つけることはできない特別な守護、絶対防衛。ヒヴアルヴエ・プロテツツイオーネ

戦において、大切な三要素がそのまま奥義となっている。例えなら剣、知恵、盾と言ったところか。

頭に“トゥリニセツテの”とつくだけあって、トゥリニセツテの持ち主しか扱えない代物である。使うために必要なのは、炎。アルコバレーノは“呪い”のおかげでおしゃぶりを通じて強く深い繋がりがあり、おしゃぶりを通じて炎を『大空』に渡すことができる。マールはアルコバレーノのような繋がりは無いが、そもそもが横の時間軸に関する力を持つため、そこから炎を得られる。

…ただ、ボンゴレだけは。先程彼女が言っていた通り、その都度炎を集める必要があった。——そしてそれは、酷く大変なことだった。いくら『大空』が“調和”することに慣れているとはいえ、元々他人の力だったものを吸収するのだ、それも六人分。その過程で、慣れない者は元の持ち主の思考なども拾ってしまうことがあるという。仮にその思考が不愉快なものであれば、“調和”に失敗することもあるのだとか。…まあ当然だろう。

誰だって不愉快な思いなどしたくないものだ。その思いが、助けようと大事にしようとしている者から向けられる謂れのない悪意なら、心を乱してもおかしくない。

過去にそんなボンゴレの『大空』が多くいたのだと、少女の前のアルコバレーノの『大空』が語っていたことを何となしに思いだしつつ、彼は今代のボンゴレの『大空』、自分の教え子のことを考え

るのだった。

とある少年Tの戯言

「あれ、リボーン？」

よう。相変わらずしけた面してんな

「うるさいなあ…何しに来たんだよ」

さーな。…お前は一体何をしているんだ？

「え、つと…日記、書いてた。」

は？

「小学校入ったところから書き始めたんだけど…あれ、リボーン知らなかった？」

…知ってたゾ

「いや、そんな盛大に目をそらしつつ言われても説得力無いんだけど…まあいいや。」

…………チカラ能力の使い方間違ってるだろ『大空』…

「っていうか、ほんと何しに来たんだよ、リボーン？ …イタリアに戻っていうなら、少ししたら戻るよ？」

ああ、それは知ってる。 ついでに世界征服の話もな

「んなっ！？　だ、誰から！？」

白い悪魔だ

「しろ…その言い方したらアイツ調子に乗るからやめろよ…」

そうなのか？

「この間…襲撃受けたとき、そう呼ばれて何だか調子に乗ったらしくて、それはもうボツコボコに…」

…それは調子乗ったとは言わねーんじゃないか…

「……思い出したらちよつと怖くなってきたな…何でオレ、あんと
きアイツの言葉に頷いちゃったんだろ…」

どんな言葉だ？

「『世界征服しちやおうよ！』」

軽いな。

「そうなんだよ軽いんだよ、さらには色々世界征服した場合の利点を二人掛かりで説かれてさ、何かもう勢いで頷いちゃって今少し後悔してんだけどどうしょほんと世界征服だよ！？あんな軽く口に出すもんじゃないんだって普通はさ！？」

あの二人に比べてお前、すっげー動揺してんな…

「あの二人？ え、二人とも会ったの？？」

ああ。超イイ笑顔で「手伝え」って言われたゾ

「…え、まさかそれが理由で日本に来たとか…、マジで！？」

ツフ。　ところでツナ、利点を説かれたって何言われたんだ？

「え…と…。　そもそもさ、今回の襲撃って、オレたち三人を狙ったものだっじゃないか。なのに並中のみんなが巻き込まれたりして…許せなくて。気付いたら人生で二度目の絶対防御ヒュアルウェ・プロテツィオーネを使ってたわけだけ…。

二人がさ、言うんだよ。『この世界を統一してしまえば、誰も自分たちを傷つけようとは思わなくなる』ってさ」

…そりゃ、敵がいなくなるからな

「つまりはそういうことなんだよね…

初めてそれ言われたときは…、二人はともかく、オレなんかのためにみんなが傷つけられかけてさ…許せなくて、それに疲れてて…つい、アイツの言葉に頷いちゃってさ…。そりゃ、敵がいなくなるから、みんな、傷つくことはなくだろうし…とは思っただけど、何か、それでいいのかなあ…って思ったりもするんだよ、ね…」

何だ、世界征服するのが嫌になったのか？なら早くそう言わねーと、あの二人さっさと始めちまうぞ？

「え、いや、うーん…かといって、結局、みんなが傷つくのは、嫌、

なんだよねー…」

早く決めやがれダメツナ

「…もうちよつとで並盛全体に被害が及ぶところだったし。そして…そつか、あんときは母さんとかチビたちにも被害が…とか考えてたんだっけ…、父さんはどうでもいいけど、寧ろ自分で何とかしろって感じだけど、母さんとかはやっぱ傷ついて欲しくないな…」

お前、ママンのことはやけに大事にするよな…やっぱマザコンか
「違っ　り、リボーンだって知ってるだろ!?　…オレが、二人と違つて、その…このままで生きてこられた、理由…」

まーな。　ママンでなけりやできねー芸当だな。　人の考えだの感情だの、はたまた過去だの未来だのがわかつちまう子どもを、何の躊躇いもなく受け入れられるのは、な…

「…母さんが、それでもオレは母さんの子どもであることに変わらない、そう言ってくれたからオレは今までこうして生きてこれたんだよ。そしたら…やっぱり大事にするのは当然だろ?」

ったりめーだ。

「二人があんなことを言い出したのはオレのためでもあるし…ここぞオレがもし引いたら、二人とも引きさがってくれるだろうけど…でも、二人とも世界のこと大っ嫌いだからさ。何か、止めるのは悪い気がして…」

…わかつてんのか…そうか、『大空』だしな…

「ん？うん。わかってるよ。だから迷ってるんじゃない。仮にオレは嫌だから二人だけで…とか言ったら本当に二人だけでやつちやいそうだし…ってかそれだったら二人とも絶対傷つく！怪我する！それは嫌だ…」

「ってーか気になったんだが、ユニとお前って所謂“矛”と“盾”だよな？ぶつけたらどっちが勝つんだ？」

「へ？…何かリボーン、勘違いしてない？」

「は？」

「いや、勘違いでも、ないのか…」

ユニの…というかアルコバレーノの、イリデッセンテ・ダルド無双攻撃は、広範囲の無差別攻撃だよ。矢の軌跡に在る存在全てにその攻撃が必ず当たる」

ああ

「オレ、っていうかボンゴレの絶対防御は、ビジュアルヴェ・プロテツィオーネ簡単に言うところ“盾”だけど、ほんとのところ攻撃を遮るものじゃないんだよね。えっと…フリーモ確か？世が言ってたんだけど、ビジュアルヴェ・プロテツィオーネ絶対防御は“目に見える盾”というより、“目に見えない加護”だ」って」

“目に見えない加護”…？

「そ。実際、本物を見るとそうなんだよ。『攻撃が当たって無い』わけじゃない、ただ、『傷つくことがない』。それが、ビジュアルヴェ・プロテツィオーネ絶対防御の能力なんだ」

…なるほど。つまり、ぶつけると、攻撃は必ず当たるが、傷つくことはない、ってことだな？

「うん。…あの襲撃のときも、ユニ、絶対防御の中から無双攻撃を放ってたしね。攻撃を遮るものだったら、内側からでも放つことは不可能ってことになるだろ？」

確かにな。

「無双攻撃も一応、ある程度軌道は変えられるらしいけど、それだけじゃ仲間を傷つけてしまうかもしれないから。…絶対防御は、そんなときのための、保険だよ」

だから尚のこと、二人だけでやらすわけにはいかねーってことか。

「…うん。…やっぱ、やろう。世界征服。」

ん？決めたのか

「だってさ、オレにとってもやっぱり、二人はこの世界で代わりのない、掛け替えのない存在なんだ。ただ、三人だけが、同じモノを知ってる。同じコトを感じられる。オレたちは、…認めたくないけど、“特別”な存在だ。」

白蘭のように、世界を憎んで否定して破壊衝動を覚えて憎み尽くして、その上で救われた存在でも、ユニのように、世界に絆されて疲れて悲しんで時折慈しんで疲れてきて、その上で救われた存在でも、

…どちらでも、ないけどさ。だってオレは救われる必要が無いほどに幸福シアワセに生きてきたから、さ。
でもオレは、仲間がいたことを知って幸せだった。独りじゃなかった、って知って、嬉しかった。だから、二人を守りたい。二人を思いを踏みにじりたくない。みんなのために—— 二人のために、生きたいし、やろうと思う」

…そうか。

「そうと決まれば訓練、かな。リボーン、ちょっと付き合ってよ」

ああ…認識範囲の拡大、だったか？

「うん。オレの認識外にいられたらいくら絶対防御でも効果はないし…、ユニに無双攻撃イリデッセンテ・ダルトの攻撃を程々でやめておいて、って頼むのも、悪いしね。これは、オレがしなければいけないことなんだ」

ま、久しぶりの修行だな。ねっちよりやってやる

「うえええ、ねっちよりヤダ…」

疲れて、眠ってしまった弟子を見る。そつとその髪を撫でてみる。今も昔も、この子は努力家だった。尤も、昔は間違った方向へかなり進んでいたが。

『大空』は、物心つく前からその能力^{チカラ}を発揮する。裏社会ではその能力^{チカラ}がよく知られているため、隔離されたり誘拐されたり洗脳されたり。それはもう、様々な扱いを受けるのだが、彼の弟子は違った。一般家庭に生まれ、普通の親なら拒絶してもおかしくないところを、受け入れられ、そして穏やかに過ごしてきた。…有り得ないほど、穏やかに。

その能力^{チカラ}故に苦しみ歪んでいくばかりの『大空』において、奇跡としか言えないほど、純粹培養の“特別な『大空』”。真の愛情をもって育った、“真^{まこと}の世界の中核”。

本来なら、トゥリニセツテの『大空』三人を指すその言葉が、残る二人の意思が最後の一人の因るために。

自身が異質であるとはよくわかっていたこの少年は、自分を受け入れてくれた母親のため、無意識に可能な限り普通であろうとした。

けれども“平凡”とは、様々なコトがわかってしまう彼にとっては逆に難しいことだったため、彼は“天才”よりも“凡庸”であれ、もしくは“愚鈍”であれと、己に課した。

結果が、“ダメツナ”である。

この弟子と初めて出会ったとき、読心術をし返され、盛大に戸惑ったことはもう良い思い出である。

(…結局、ルーチェやアリアやユニと相對してるときと一緒、ってことだからな)

一応、白蘭も、か。

思いつつ、撫でていた手を止める。

(…しかし、コイツらの天然はどうにかならないもんか…)

『大空』であるが故、だろうが。妙に悟っていてその上で無意識に周囲を振り回す言動をする三人。良くも悪くも、三人ともが“違った意味での天然”なのだ。

内心の溜め息が口から出そうになるのを呑みこみつつ、彼はその場を去った。

とある拝聴者Rの報告

某年某月某日

数カ月前、ドン・ボンゴレ九代目の指令のため、日本に渡りある少年——沢田綱吉を教育した。

尤も、基礎能力をあげれば後は問題なく成長していくだろう素質があつたから、大した苦勞ではない。

守護者の選抜とある程度の教育を終えた後、イタリアに連れて行くことになった。

九代目との正式な対面、正当なる後継者としての宣言のためだ。それらを終わると、日本に戻るには少し時間があるということになった。

沢田綱吉は渋つたが、取り敢えず残るトゥリニセツテの『大空』二人と対面させる。

すると、日本に戻らないことを了承した。何があつたかは三人のみぞ知る。

イタリアに滞在した期間は当初の予定よりも短くなった。トゥリニセツテの『大空』三人で共謀し、脱走したのだ。

根回しも完璧で、いつの間にやら沢田綱吉の守護者のいる日本へ転校したようになっていた。

：学校なんぞ行ってないんだがな、二人とも。
だがそのときには違う任務についていたため、一先ず保留。

半月ほど前。トゥリニセツテの『大空』三人が通う並盛中学に、馬鹿なファミリーが襲撃をかけた。

馬鹿は馬鹿なりに考えたようで、あの雲雀恭弥までもが深手を負ったらしい。何よりもそのことに驚く。

だが守護者たちが傷つけられていくその姿が、誰よりも優しく仲間思いの“ボンゴレの『大空』”の逆鱗に触れた。

そこで沢田綱吉は人生で二度目となる絶対防御を使った。ヒヴァルヴェ・プロテツツイオーネ

ちなみに初めて使ったのは、リング戦直後に受けた襲撃でだ。居合わせたからよく覚えている。

…あんときの使った理由は、怪我している仲間をさらに傷つけないため、とかそんなだったな…。

結果、そんな“ボンゴレの『大空』”に呼応し、残る『大空』二人も参戦。

世界史上恐らく初となる、“トゥリニセツテの『大空』”の奥義”が三つ、完璧なつり合いで使用される出来事となった。

そうなってしまうば“世界の中核”に勝ち得る存在があるはずもなく。

…ちなみにこのとき、並中を破壊しないよう気を配ったこと（ヒヴァルヴェ・プロテツツイオーネ主に絶対防御の効果）で雲雀恭弥は『大空』たちをかなり優遇しているらしい。

“ボンゴレの『大空』”の逆鱗の在処を考えるに、しばらく日本から離さない方が良さだろうと、現状維持が決定。

負傷者たち・破壊された建造物等のため、多くの資金・人材等が提供された。

勿論、トゥリニセツテの『大空』が所属するファミリーを始めとしたイタリアンマフィアから、である。

一週間ほど前、ジツリヨネ口から入った情報には、『姫が世界征服を考えているらしい』というものがあつた。

独自のルートからそれが事実らしいと発覚。さてどうしたもんかと考えていると、あの白い悪魔から連絡が来た。

…というか一方的に連絡をつけられたんだが…一体全体どうやったらごく普通のテレビをテレビ電話にできるんだか…

まあ可愛い弟子のためだ。九代目からの指示もあつたし、手伝つてやるうじやないか。

やってきてみた日本では、相変わらず天然な『大空』たちに振り回されている面々がいた。

…何だか和むんだよな、アレ。

あれこれと言っていたがやる気はあるようで、それぞれに修行していた。一通り見て回ったが、殆ど文句のつけどころが無い。

あとは、主の…沢田綱吉の許可さえあれば、奴らは世界中で縦横無尽に戦い尽くすだろう。

そして統一してしまうに違いない。これは確信というより、確定した未来だと考える。

「…こんなもんか」

来る戦いにそなえ、簡単な記録を残す。後にちゃんと清書して九代目に届けなければならぬということもあつて、内容は中途半端に整い崩れている。

まあそなえと言っても負けることなんざ全人類が滅亡したとしても有り得ない。きっとアイツら三人…いや、“真^{ツナ}の世界の中核”のことを考えると、アイツらの周囲の人間だけは生き残るだろうから、…不戦勝か。兎に角負けは絶対に有り得ない。

「勝ち戦に参戦つてのも馬鹿馬鹿しくはあるがな…」

今回ばかりは、特別だ。そう思う自分に、何だかんだ言つて俺もツナには甘いんだな…と気付く。『大空』がいるところでは絶対に考えちゃいけない思考だ。バレたら死ぬ。

だがやはり、ツナのそばは心地良い。『大空』であるが故の、大きな魅力なのだと、今なら窺い知れる。

『大空』というのは、その特性である『調和』でもって、周囲の

考え、感情、場の空気、時には過去の情報から未来の予言といった、ブライベートや一歩間違えればトチ狂っているとは思えないことまでも読み取ってしまう“イキモノ”だ。…敢えて“イキモノ”と言ったのは、その特性を持つのが人間だけとは限らないから。

人間に限らず『大空』のイキモノは長生きしない。自身の能力に耐え切れず、生きていく気力を失うからだ、擦れながらも生きていく数少ない『大空』たちは語る。

そう、ツナのように、受け入れてもらえる方が少ないのだ、圧倒的に。だから生きない。生きたくない、考えてしまう。

『大空』でない我が身には、想像することしかできないことだが。

そして…これは実証されているわけでもないし元よりツナのような『大空』が今までいなかったことだから知られていなかったことだが、『調和』には違う作用もあるようだ。簡単にいえば…同調による癒し効果？

『大空』の心情なんかが、周囲に伝わってしまうが故のことらしいが。日々自分よりも他人を気遣うツナのそばにいと、皆が皆それにたられていくのだ。染まっている自分に気付いたのは、一度ツナのそばから離れて戻ったときだった。心底驚いた。

トウリニセツテの他の『大空』曰く。

ツナはママンが受け入れてくれたことにより他の『大空』よりも素晴らしく愛情を受けて育ったが、それでも『大空』であることには限りない。悲しみも悔しさも辛さも怒りも痛みも苛立ちも苦しみも味わってきた。それ故に強く弱い、芯のしっかりしている人物だと。自身の妙な能力に戸惑いながらも中学一年になり俺のやってくるその日まで、自分で必死に考えて生きてきた人物だと。

だから、人を見る目は育っている。

普段から読まないようにするのは『大空』共通の心得。ツナもいつ頃からかそれは実践していたそうだ。問題はその逆。マフィアと

いう人種に限らず、何事もオトナになれば内心を読ませないようにするのは至極当然。

だから中々気付けなかった。ツナが、心許した人物には、自分の心情をダダ漏れにしてしまうことなんて。

まあ考えていることがそのまま顔に出る、ってのは普段からだ。それとの違いは…。

例えば、既に見せかけているフェミニストの片鱗。女性に相對しているとき、可愛いなあだの綺麗だなあだの思っているのが周囲にも伝わってくる。そうするとそこまで思っていなかった周囲の面々ですらその女性にそういう感想を抱くようになる。

例えば、ツナの周囲で奴の取りあいをしている奴ら。普段はツツコミで奴らの言動にあたふたするツナだが、最近はある二人がそばにいるときに限りのんびりと構えていることが多く、そういうときは気付けばツナののほほんとした心情、もしくはのんびりしたいなあとかという心情が伝わってきて、いつの間にやら喧嘩等々が終結している。

例えば、トゥリニセツテの他の『大空』。ツナが余りにも世界平和を望むので、根っからの『世界』嫌いをどっかに放り投げて世界統一なんぞ考え始めた。ちよつと前まで『世界』に対して抱く陰謀といったら「世界中にある核爆弾を全て爆発させたら、地球はやっぱり粉々になるかな?」「どうでしょう。試してみたらどうですか?」とかだったのに。ああ恐ろしい。

「…ツナは、最強だな…」

いや待て、日本語では普通「サイキョウ」は「最強」だが、他にもあるよな。凶だの恐だの狂だの嬌だの侠だの驚だの狭だの胸だの怯だの協だの恭だの享だの香だの…何か変なのも混じったか?まあ

いい。

「取り敢えず、ツナは最強だ。」

アイツ自身がというよりもアイツの周囲が、だが。まあそれすらもアイツの魅力とやらで集まった面々だ。あながち間違っちゃいないだろう。

「…ユニは…最凶…、だな…」

さすがは我らがボスアルコバレーノというか、あれで妙な貫禄オーラがある。ほんの少し未恐ろしい。

「白蘭は…ああ、最狭だな…」

奴の（トウリニセツテの他の『大空』二人に対する）心の狭さは異常だ。やっぱ環境ってのは人間の性格に影響すんだな…

呟きつつ、報告書の下書きの端っこにつらつらと三つの単語を書き連ねる。そして改めてうん、間違いない。と納得する。誰もいないので自画自賛もおこう。流石俺様。

「…さて。行くかレオン」

———
そろそろ合図の準備も始まっている頃合いだろう。

とある拝聴者Rの報告（後書き）

終わりです。

初めての予約連続投稿。あまりにも正月やらなきやいけないことあつてそういうときつて逆に燃えますよね！↑

勢いで書いてしまいました。あらずじやタグにもありましたが、メインリレー連載並に長くなりそうだったのを、（待て俺…『今一度よりも長い話を書く？それ何てフラグ？ただの未完を増やすだけだる teme エ！』）と考えた末に書きたかったことを抽出してとにかく盛り込んでみました。…何か書き足りない。でももう書きようが無い。畜生。

この話はただの愛され綱さんですよーカプ表現はないのですよーたぶん。取り敢えず私は考えてません。長編でネタ考えてた時もカプの要素は一切考えてなかった…まあ白蘭の病的なユニと綱さんに対する心の狭さ^{愛情}についてはかなり考えてましたが。この話の奴なりの愛情です。

大空末世代三人組（綱さん・ユニ・白蘭）が仲良しな話が好きです。一緒に悪戯とか考えて周囲を振り回せばいいと思います。あ、悪戯仕掛け人！そんな感じで！この三人組、綱さん〃白、ユニ〃灰、白蘭〃黒、だと思つてます。え、何が？お腹の色ですよ↑
この話ではその辺頑張つて書いたつもりですが…どうでしょうかね…？

おお、長くなつてしまった。では今年も皆様、さゆともども暴走^想走もしくは妄想^{暴走}していきますので、温かい目でお付き合いください…。

B y 梨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897ba/>

“サイキョウ”は、誰？

2012年1月12日12時46分発行